

第39回原子力委員会定例会議議事録（案）

- 1．日 時 2005年10月4日（火）10：30～12：05
- 2．場 所 中央合同庁舎第4号館7階 共用743会議室
- 3．出席者 近藤委員長、齋藤委員長代理、木元委員、町委員、前田委員
 内閣府
 戸谷参事官、赤池参事官補佐、池田主査
 経済産業省
 原子力安全・保安院原子力発電安全審査課 鈴木統括安全
 審査官、牧野統括安全審査官
- 4．議 題
 - （1）前回議事録の確認
 - （2）関西電力株式会社大飯発電所の原子炉の設置変更（1号、2号、3号及び4号原子炉施設の変更）について（答申）
 - （3）関西電力株式会社高浜発電所の原子炉の設置変更（1号、2号、3号及び4号原子炉施設の変更）について（答申）
 - （4）中部電力株式会社浜岡発電所の原子炉の設置変更（1号、2号、3号、4号及び5号原子炉施設の変更）について（諮問）（経済産業省）
 - （5）日本原子力発電株式会社敦賀発電所の原子炉の設置変更（2号原子炉施設の変更）について（諮問）（経済産業省）
 - （6）市民参加懇談会 in 福岡について
 - （7）第49回国際原子力機関（IAEA）総会出席及び要人会談について
 - （8）町委員の海外出張報告について
 - （9）その他
- 5．配布資料
 - 資料1 - 1 関西電力株式会社大飯発電所の原子炉の設置変更（1号、2号、3号及び4号原子炉施設の変更）について（答申）（案）
 - 資料1 - 2 関西電力株式会社大飯発電所原子炉設置変更許可申請（1号、

- 2号、3号及び4号原子炉施設の変更)の概要について
- 資料2 - 1 関西電力株式会社高浜発電所の原子炉の設置変更(1号、2号、3号及び4号原子炉施設の変更)について(答申)(案)
- 資料2 - 2 関西電力株式会社高浜発電所原子炉設置変更許可申請(1号、2号、3号及び4号原子炉施設の変更)の概要について
- 資料3 - 1 中部電力株式会社浜岡原子力発電所の原子炉の設置変更(1号、2号、3号、4号及び5号原子炉施設の変更)について(諮問)
- 資料3 - 2 中部電力株式会社浜岡原子力発電所原子炉設置変更許可申請(1号、2号、3号、4号及び5号原子炉施設の変更)の概要について
- 資料4 - 1 日本原子力発電株式会社敦賀発電所の原子炉の設置変更(2号原子炉施設の変更)について(諮問)
- 資料4 - 2 日本原子力発電株式会社敦賀発電所原子炉設置変更許可申請(2号原子炉施設の変更)の概要について
- 資料5 「市民参加懇談会 in 福岡」の概要
- 資料6 第49回国際原子力機関(IAEA)総会出席及び要人会談について
- 資料7 - 1 町原子力委員の海外出張報告(ベトナム)
- 資料7 - 2 町原子力委員の海外出張報告(ウィーン)
- 資料8 第36回原子力委員会定例会議議事録(案)
- 資料9 第37回原子力委員会臨時会議議事録(案)
- 資料10 第38回原子力委員会臨時会議議事録(案)

6. 審議事項

(1) これまでの議事録の確認

事務局作成の資料8の第36回原子力委員会定例会議議事録(案)、第37回原子力委員会臨時会議議事録(案)、第38回原子力委員会臨時会議議事録(案)が了承された。

(2) 関西電力株式会社大飯発電所の原子炉の設置変更(1号、2号、3号及び4号原子炉施設の変更)について(答申)

標記の件について、内閣府戸谷参事官及び池田主査より資料1 - 1及び1

- 2 に基づいて説明があり、以下のとおり発言があった。

(近藤委員長) ご異論がないようなので、本案にて答申させていただく。

(3) 関西電力株式会社高浜発電所の原子炉の設置変更 (1 号、2 号、3 号及び 4 号原子炉施設の変更) について (答申)

標記の件について、内閣府戸谷参事官及び池田主査より資料 2 - 1 及び 2 - 2 に基づいて説明があり、以下のとおり発言があった。

(近藤委員長) ご異論がないようなので、本案にて答申させていただく。

(4) 中部電力株式会社浜岡発電所の原子炉の設置変更 (1 号、2 号、3 号、4 号及び 5 号原子炉施設の変更) について (諮問)(経済産業省)

標記の件について、経済産業省鈴木統括安全審査官より資料 3 - 1 及び 3 - 2 に基づいて説明があり、以下のとおり発言があった。

(近藤委員長) 本件については、検討して後日答申を申し上げる。

(5) 日本原子力発電株式会社敦賀発電所の原子炉の設置変更 (2 号原子炉施設の変更) について (諮問)(経済産業省)

標記の件について、経済産業省牧野統括安全審査官より資料 4 - 1 及び 4 - 2 に基づいて説明があり、以下のとおり質疑応答があった。

(近藤委員長) 工事資金に関わる参考資料が今回の資料に含まれていない。工事に要する資金が約 5 億円と少ないからか。

(牧野統括安全審査官) そういう訳ではない。今後、必要ならばの審査の中で 5 億円の内訳等をご説明させていただく。

(近藤委員長) 資料 4 - 1 に「総工事資金の調達実績と比較して、今後の資金調達は可能と判断した」とあるが、我々もその調達実績を見ないと判断

できないので、後で資料をいただければと思う。

(木元委員)素人的な発想だが、今回の工事に伴い原子炉容器上部ふたを保管するということであり、一般的なイメージからすると、ふたは伏せる形で置くほうが安定すると思うが、今回は資料４－２の２ページのように横に立てる形で置く。その方がよいのか。

(牧野統括安全審査官)建物の形状等、色々な事を考慮しての設計であり、横に保管する場合もあり、伏せる形で保管する場合もある。原子炉容器上部ふたの上に色々な機器が付いているので、伏せる形で保管する場合は上部を切断して高さを低くすることもある。

(木元委員)どちらが安いのか。

(近藤委員長)おそらく安い方を選んでいると思う。

(齋藤委員長代理)原子力委員会が判断すべき経理的基礎について、先程の参考資料であるが、これらの諮問の際に原子炉容器上部ふたの取替え費用が５０億円程度と説明されたが、工事に要する資金の１０倍も要し、その意味での参考資料も見せていただくことではないか。

(牧野統括安全審査官)今日答申をいただいた案件の諮問の説明の際にも、説明させて頂いたが、原子炉容器上部ふたの取替自体は設置変更許可事項に当たらないため、答申の案件は工事を伴わず工事費用は発生しない。本案件は保管庫を建設するので保管庫設置に係る工事費用が発生する。

(齋藤委員長代理)取替える原子炉容器上部ふたは材料なども含めて現在のものと同じか。

(鈴木統括安全審査官)基本的には同じであると思う。

(近藤委員長)材料は変わると思う。

(牧野統括安全審査官)設置変更許可申請の対象となる部分での変更はなく、基本的には同じである。ただし、工事計画認可において詳細に確認することになっている。

(近藤委員長)それでは、本件については検討して後日答申を申し上げる。

(６)市民参加懇談会 in 福岡について

標記の件について、内閣府戸谷参事官より資料５に基づいて説明があり、以下のとおり質疑応答があった。

(木元委員)明日また御前崎市において「知りたい情報は届いていますか　～

これまでと、これから～」というテーマで市民参加懇談会を行う。「これまでではどのように情報が届き、受け取ったのか。これからはどのように届けてほしいのか。」という前向きの形で議論したいと思う。

資料5の2ページから発言の例が書かれている。「知りたい情報と一口で言っても、個人によって異なり、どこまで詳しく知りたいかも違うといったところが難しい。」「知りたいと思ったときにその情報がない。」ということを実感としてそれぞれが持っている。それから、受け手の考え方をどのように捉えているかという送り手の姿勢のあり方や、受け手のレベル、スタンス等を知るべき、ということについて議論された。「受け手がこれを知りたいと思った時に、自分から積極的にアクセスすることが必要ではないか。」という発言もあった。資料の後半に出てくるが、「国に聞いても分からない、学者に聞いても分からない、インターネットで検索するのは大変、結局一番丁寧に教えてくれる電力会社の広報に聞く。」という発言があった。電力は身近にいるので当然とは思いますが、原子力委員会としては、こういった一般の方の反応を把握しておく必要があると思う。

第1部ではそれぞれがかなり積極的にご意見を出していただいた。2ページの6番目は出光氏のものであるが、「情報を正確に伝えようとしすぎると、難しくなり、理解してもらえない。分かり易く簡単に伝えようとする、正確さに欠けてしまう。」とのことは永遠の課題である。「マスメディアからの情報発信は、すべての人の理解度が揃ってないので、万人にわかるように説明しにくい。」というのは実感だと思う。解決法はあまり無く、説明する対象や、受け手によって言葉を変えていくといった方法しか無いのかなと思う。

次の発言例も出光氏のものだが、例えば、プルサーマルについて報道された時に、全体像が分かっている人は、全体のこの部分を説明していると分かるが、そうでない人は一部分の情報を受け取っても分からない。その補完のために、講演会、市民参加懇談会のようなもの、Q & A、説明会などが必要ではないかということについて、皆が同意した。

次の発言例だが、「原子力だけでなく、環境もテーマに掲げると人が集まるが、原子力だけでは集まりにくい。」ということであった。「導入部として環境を話し合い、原子力はこのように環境に寄与している、と持っていくような工夫が重要。」という発言もあった。「受け手が原子力の危険性を知りたいのか、あるいは、原子力が環境に対してどういう影響を与えているかが知りたいのか。」を分かていないと話を持っていきにくい、という実感のある話も出た。

次の発言例だが、「国が国民に原子力発電についての意見を公募したとき、Q & Aの冊子に出した意見が載っていなかった。返事が無くがっかりした。時間がかかっても、答えが欲しかった。」ということであった。その次の発言と同じく小出氏のものであり、大変熱心な方である。これは現行の長計（原子力の研究、開発及び利用に関する長期計画）についてパブリックコメントを行った時のことである。調べると、質問されたそのままの言葉ではなかったが、資料にその質問と答えが載っており、それらの資料をお送りすることにした。

次の発言例についてだが、自分たちの暮らしを小さくしていこうという考えをお持ちの方で、ご発言を聞いて自然エネルギーと原子力を対比して考える情報が届いていないということを私は痛感した。そのところを懇切丁寧に説明しなければならないと思った。「自然エネルギーが原子力に取って代ればよいのでは。電力が不足するなら暮らしを小さくすべき。」というご意見だが、「暮らしを小さくする。」の小さくのレベルと、国民がどう受け取るか、という問題があると思う。

3ページの2つ目の発言例は、「マスコミは、本当に必要な、知っておくべき情報を新聞等で紹介することが役割であると思う。」ということだが、「新聞社もそれぞれの個性や考え方があり、重要視する度合いも違うので難しいところがある。」という議論になった。

次の発言例は、「学者は答えるのが下手。」ということだが、「正確な情報を伝えようとする、相手が分からなくなる。」というもどかしさがあったと思う。また、これは謙虚に受け取ったが、役所の情報は古いとのこと。資料の裏を見ると2003年のものであったとか。一方、原子力に反対の立場の方は、瓦版的な情報もあり、早い。やはり最新の情報が欲しいので、それを出せば、その情報を受け取って考える方が増えるのではないかといいご意見だった。難しいかもしれないが、努力したいと思う。

次の発言例は、これが一番問題ではないかとコアメンバーも感じたことだが、「この人はこういうことが知りたいのだな」と分かったとしても、知りたい人と知らせたい人の情報の伝え方や時期などがかみ合わないことが多く、これにより疑問や不安が出てくる土壤が生まれるのではないかといいことであった。これも難しいかもしれないが、努力しなければならないと思う。

次の発言例だが、役所の情報だけでなく、インターネットの情報も常に更新されていることが必要ということである。

次の発言例は、リスク情報の共有についてである。公開できない情報が

あるということも前提にあると思うが、「情報を伝える立場として、リスク情報があったときに、公開したいがどこまで公開したらよいのか。ストレートに公開すると、知識を持っている人は分かるが、そうでない人は単に不安や不信感などを増幅してしまうので、どこまで公開してよいのかわからない。」という声があった。やはり、受け手の安心、危険の捉え方が違い、情報を出した後のフォローが出来ていないため、「危険なものだ。やはり怖い。」で終わってしまうことが実際にある。

そして、次の次の発言例のように、「知りたい情報は届けましたと言うが、その後のフォローが出来ていない。そのフォローの体制が必要である。」ということであった。

第2部では、会場から、1人の方が複数回発言されたのを重複して数えないで、12名の方が発言され、活発にご意見をいただいた。スタンスとしては、やはり、原子力発電そのものに反対の方、あるいは原子力発電は認めるけどもプルサーマル導入に対して疑問に思う方、耐震性に問題があると思う方など、そういう方が、前に座ってかなり積極的に発言された。

3ページが一番下の発言例だが、「世の中の半分以上の人が原子力をよく理解していない。危険であるという情報により不安になる人に、関心を持ってもらうことが必要。危険と思われてよいが、それで終わるのでなく、興味を持ってもらうための第一段階のきっかけ作りが必要。」ということである。「例えば、市民参加懇談会のようなものがあればきっかけ作りができるのではないか。」という発言もあった。

次の発言例は、反対の立場にある方のものであり、「チェルノブイリの事故の後に勉強するようになり、反対の考えになった。」ということである。

「原子力発電所から出る廃棄物は高レベル放射性廃棄物を含めて情報は出ているが、ウラン鉱山の大量の廃棄物の情報までは出ていないので出して欲しい。」ということを言われたが、それに対してコアメンバーから「危険なウランを取り除いた残りであり、少量のウランは残っているかもしれないが、危険ではないのでは。」と発言するといったやりとりがあった。色々と意見交換をしていくと、情報の実態が見えてくると感じた。

次の発言例だが、「原子力委員会に核燃料サイクルに関する意見を出したが、質問に答えていただけなかった。」とのことである。これは、「核燃料サイクルのあり方を考える検討会」において意見を募集した際の意見であり、確認したところ資料に載っていた。しかし、ご意見として取り扱われていたが、ご質問には答えていないところがあったように私は思った。これについては、このようになっていきますと対応することにした。

次の発言例だが、「原子力のことを子供に説明するために知りたいと思い、インターネットで検索すると、ヒットする数が膨大であり、たどり着くのにかかる時間がかる。例えば、『子供のための原子力について』というホームページを設けて、そこから入っていくようにできないか。」ということであった。具体的なアクセスの方法が提案されたので、フォローしていくべきであり、大切なことであると思った。

4 ページの下から 4 つめの発言例は、市民参加懇談会にはありがたかったが、「原子力の事が全く知らない人たちに、このような活動をやっていることを、広く伝えられればよい。」ということである。そういった窓口として受け止められていることは我々にとって責任があると思う。

次の発言例は、「教職員が、例えば、福岡の地震があった時に、原子力の情報として耐震性は大丈夫だったと伝えたかったが、父母の顔色を伺ってしまい、原子力のことを取り上げてくれるなという雰囲気があると、取り上げられない。議論になるのを避けている。だから、教職員に任せるのではなく、文部科学省のガイドラインみたいなものを作って欲しい。」とのことである。これは文部科学省に伝える必要があると思う。

次の発言例は、「原子力発電の必要性や有効性、そういった国の政策がどのくらい伝わっているかと言うと、残念ながら伝わっていない。マスメディアにしっかり伝えて欲しい。」ということである。一方、「学校教育、社会教育の中で伝えていく必要があるのではないか。」と発言された方もいるが、いずれにしても、情報を聞いて、その人が選択する知識が持てる土壌が欲しいということであったと思う。

4 ページの最後の発言例は、「オフサイトセンターでの災害シミュレーションの広域情報が知りたかったが、そこにいる職員が操作出来なかった。」ということであるが、オフサイトセンターの意味がまだ理解されていないように思った。「災害が起きたときにどのように広域情報が伝わって、どういう活動をするかというシミュレーションを、オフサイトセンターでいつでも見ることができる。」ということその方が聞いていたのかどうかはわからないが、それを操作する人は常時そこにいるわけではないので、少し工夫が必要だと思った。

5 ページの残りの発言例は、反対の立場の方からのものである。「使用済 MOX を国はどうしたいのか伝わってきていない。バックエンド試算の 19 兆円、それが全部再処理すると何十兆円になる。」という発言があった。

最後の発言例は、「プルトニウム利用計画が出てない。」ということだが、これは、事業者がプルトニウムを利用する際に随時出す情報である。それ

に付随して、「利用計画を出したとしても、安全性の情報は届かない。」というご発言があり、しっかり受け止めたと思う。

その上の発言例は、「物事には必ず裏と表があるので、正しく情報を知りたければ、双方向コミュニケーションをする努力が必要。」とのことだが、これはそのとおりだと思う。やはり、相互に伝え合い、相互に理解しあうという姿勢が担保されなければならない。切り口が「知りたい情報は届いていますか」であったが、地震やプルサーマルなどにからんでのご発言が多く、かなり見えてきたものがあったと思う。

(前田委員) 今回「知りたい情報は届いていますか」というテーマで行われたが、以前同じテーマで行った際は、情報が届いているかということもさることながら、それ以外の、原子力が怖いとか安全性といった議論が多々あったと思う。今回は、情報が届いているかどうかについてのみ、全部の時間を丸々使って議論されたことが非常に面白く、よかったと思う。全体的な感想だが、「届いていますか」と聞かれて、「届きすぎるくらい届いて、情報が氾濫している。」という反応と「全く届いてない。」という反応と両方あった。届いているが自分は見つけれないというもどかしさもあるだろうし、見つけにいく努力をしていないこともあるだろう。受け手側には探す努力をしていただく必要があるが、我々もやはり届ける情報を取り出しやすくする工夫が必要だという気がした。例えば、インターネットやホームページの作り方、情報の分類の仕方、受け手に対応して整理したものを送るなど、まだまだ工夫の余地はあったと感じた。

(齋藤委員長代理) 木元委員から詳しくご報告があったのでごく簡単に補足するが、第2部の発言者は12名であり、2回、3回と発言された方も1名として数えているので、会場からは延べ数で15、6回の発言があったということである。前田委員が言われたように、今回は、情報が届いているかどうかには絞られた議論であった。その中で一つ非常に感心したのだが、高校の先生がお二人、時間外にご自身で色々まわってよく調べ、非常に熱心にエネルギーや原子力の教育をされているそうである。ただし、残念ながら、そんなに熱心ではない先生が多数であり、また、先程説明があったように、PTAの顔色を伺っているところもあるという、正直な話をお聞かせいただいた。原子力委員会でも、近々、エネルギーや原子力の学校教育について、憂慮され問題を提起されている方、教育現場の方や文部科学省から話を伺い、議論する予定である。原子力委員会として、この問題に対するそういった取組を行い、インターネット等を通して伝えていきたいと思う。

当日少し出た話であり、なかなか難しいと思うが、サラリーマンなどの一般の人は、今回のような午後の時間帯に出席するのは難しく、夜に開催するのがよいのでは、という発言もあった。その辺については、過去コアメンバーでどのような議論がされたのか。

(木元委員)色々な方がいて、なかなか難しい。今回も昼間に設定した結果、「私は来られる」、「私は来られない」という話が当初からあった。土曜日、日曜日となると難しい方もいるし、夜は難しいという方もいる。一般の方が来やすいようにと考えた際に、コアメンバーの中でも、主婦を対象にしたいという意見が以前からあり、それならば昼間がよいだろうということになった。

(齋藤委員長代理)曜日、時間等の設定はなかなか難しいと思う。青森では女性の方が逆に、「私は昼間働いているから夜やってくれ」と言われた。

(木元委員)場所によって異なる。

(近藤委員長)一般的には土曜日の午後が一番よいと思うが、以前から議論されてきたことなので、ここでは議論しない。

(町委員)3ページの「学者は答えるのが下手。」という発言だが、研究者や技術者も含めて答えるのが下手と思われるのではないかと思う。別の箇所に書かれていたように、正確に伝えようとするとどうしても話が難しくなってしまうということだと思う。

(近藤委員長)これは本人が自分は下手と言っているだけで、受け手がそう思っているかどうかは分からない。

(木元委員)思っている人もいるし、思っていない人もいる。例えば、同じ出光氏のプルサーマルの新聞記事についての発言にあるように、ピースだけ見て全体像がわかる人もいれば、分からない人もいるということである。

(町委員)全体像を伝えることが正しく理解してもらうために必要である。研究者や技術者は、正確に伝えようとするために、受け手がどこまで知っているかをあまり頭に置かないで難しく話をしがちなので、受け手のことを考えて話す心がけが必要だと思う。IAEA(国際原子力機関)では、日本の拠出金を使って情報を伝える人を訓練するプログラムを行っている。

役所の情報が古いという発言があるが、私は役所はかなり新しい情報を提供していると思うが。

(木元委員)具体的にどの情報がということは言わなかったが、例えば、パンフレットに2003年作成と書いてあったりする。

(近藤委員長)2003年のデータが一番新しいかもしれないし、年号だけで古いとは言えない。こういう意見はきちんとお聴きして、司々が生かし

ていくべき。ここではご意見を踏まえての我々の政策課題を整理をすべきである。

(木元委員)パンフレットの中のグラフに2003年のデータとして載っていれば、最新の情報であるが、パンフレットの裏に2003年発行となっていれば、やはり古い情報になる。

(近藤委員長)毎年改定するものなのかどうかという問題もある。5年や10年に一度更新するデータもある。

(木元委員)その辺を説明すればよいと思う。

(町委員)役所はホームページで情報を発信していると思うが。

(近藤委員長)ホームページを最新の情報に保つのもなかなか大変である。

(木元委員)反対する方達の方が早い。例えば、策定会議がどこで行われ、どんなことが討議された、とパッと発信される。

(町委員)反対する方達の方が早いというのは情報を捕まえるのがうまいということか。その情報が正確かどうかも大事であると思う。

4ページに、教職員が父母の顔をうかがって、という発言がある。先日、前橋高校から頼まれて生徒に原子力の話をしたところ、その校長先生から「非常に勉強になったから、今度は校長会で話をしたい。」と言われ、今月話をする事になっている。原子力の事を教えるのに父母の顔を伺うということがあるのだろうか。

(木元委員)町委員はご依頼を受けて話されたのだが、そうではなくて日常の教職活動の中でのことである。例えば、授業中にニュースになっている原子力の話が出た場合に、先生は知識があるからそこで原子力のことを説明したいと思うが、A、B、Cとクラスがあって、Bクラスでのみで話をしたとなると、父母から「なぜこのクラスで原子力の話をしたのか。」と言われることになる。先生が自発的に授業で説明するときのために、ガイドラインを作成して欲しいということ。原子力についての説明と、関連するデータが準備され、さらに、指導要領の中にエネルギーや原子力の教育が入ってくればよいのかも知れない。

(近藤委員長)個性の尊重や多様性の重要性を説く一方で、時々国家主義的な意見も出る。こういったことについては、現場とのやりとりでPDCA(Plan-Do-Check-Action)サイクルをまわしていけばよいと思う。

(木元委員)事務局は頑張って会議の内容を短くまとめていただいた。

(近藤委員長)非常によくまとまっていて、内容がよく分かったと思う。

(7) 第 4 9 回国際原子力機関 (I A E A) 総会出席及び要人会談について

標記の件について、内閣府戸谷参事官より資料 6 に基づいて説明があり、以下のとおり質疑応答があった。

(前田委員) フランスのビュガ原子力庁長官が、日仏双方の施設の相互利用の促進を提案され、もんじゅが例としてあげられているが、フランスの施設で例としてあがったものはあるのか。

(戸谷参事官) フランス側からこういう施設を提供したいといった個別具体的な話はこの場では無かったと思う。もんじゅを先方が具体的な例としてあげたのは、恐らく、アクチニドの燃焼の研究について既に日仏間で専門家同士の検討が進んでいること等を念頭においていたためではないかと思う。

(齋藤委員長代理) フランス側の施設としては、ジュール・ホロビッツ炉というこれから建設する最新鋭の材料試験炉や、アクチニドを含む燃料の製造施設などが考えられると思う。それから、I T E R 計画にインドが参加したいとも言っているようだが、それに対してフランスはどのように考えているのか。

(戸谷参事官) I T E R 計画については、資料にあるように、日本は準ホスト国としての役割を一生懸命果たし、欧州もきちんと役割を果たすといった程度の話で終わっており、参加国をこれ以上拡大するといった議論はなかった。

(8) 町委員の海外出張報告について

標記の件について、内閣府戸谷参事官より資料 7 - 1 及び 7 - 2 に基づいて説明があり、以下のとおり質疑応答があった。

(町委員) I A E A 総会については、石油の値上がりや、温暖化が原因と思われる異常気象などがあり原子力発電の必要性についての認識が高まりつつある。インドは世界的な原子力ルネッサンスという言葉で演説の中で使っていたが、インドのみならずかなり多くの国が原子力に対する積極的な見方を持ち始めているという印象を持った。特にインドは、米国との協力が決まっており、そういうことも契機として、原子力をさらに推進し、国

際的な貢献を強めていきたいと原子力委員長が言われた。

「アジア原子力協力フォーラム（F N C A）人材養成ワークショップ」では、各国が真剣に現実的な議論をした。アジア原子力訓練の教育プログラムについては、まず重要な分野からパートナーシップを基本に始めることにした。ベトナムの原子力発電の導入については、ハイ工業大臣によれば、進んではいるが、本格的なF S（フィージビリティスタディ）に入る時期はまだ完全には見えていないとのことである。本格的なF Sに入るということは、原子力発電の導入がかなり現実になづくということであり、相当な資金を要することになるので、慎重に議論を進めるということであった。

（木元委員）ベトナムの建設候補地は、これまでと同様にフーイエン省の建設候補地から変わっていないのか。

（町委員）今のところ変わっていないとのことである。

（ 9 ）その他

- ・ 事務局より、10月11日（火）に次回定例会議が開催される旨、報告があった。